

2019 年 10 月 16 日

米濱泰英

真珠湾攻撃

「大統領は、わが国がおそらく（早ければ）次の月曜日にも攻撃されるであろうと指摘した。これは日本が予告なしに攻撃することで悪名高いためであり、問題は、わが国としてどうすべきか、ということだった。問題は、いかにしてわが国に甚大な危険を招くことなく、日本が最初に発砲するような状況に導くか、ということだった。これは難しい課題だった。」（ビーアド『ルーズベルトの責任——日米戦争はなぜ始まったか』に引くスティムソン陸軍長官の 1941 年 11 月 25 日の日記）

「今となつては、日本がハワイでわが国を直接攻撃したことで問題をすべて解決してくれた。・・・日本がわが国を攻撃したという報せを最初に聞いたとき、私がまず感じたのは安堵だった。優柔不断のときは終わり、わが国の国民が一致団結するような形で危機が訪れたのだった。それから一気に拡大した大惨事の報にもかかわらず、私の中ではこうした思いがずっと支配的であり続けた。というのは、これまで愛国心に欠ける人間が煽ってきた無関心と分裂が非常に残念なものであったのに対して、この国が団結したとなれば恐れるものはまず何もないからだ。」（同上、12 月 7 日の日記）

第二次世界大戦 開戦前後

1939 年 5 月～8 月	ノモンハン事件
1939 年 8 月	独ソ不可侵条約
1939 年 9 月	第二次世界大戦勃発
1940 年 9 月	日独伊三国同盟
1941 年 3 月	米、「武器貸与法」成立
1941 年 4 月	日ソ中立条約
1941 年 6 月	ドイツ、ソ連に奇襲攻撃
1941 年 12 月	日米開戦

「日ソ中立条約」締結を観ていた蒋介石

「松岡は予定の期間を越えてモスクワに滞在している。これはソ日間に特殊な重要交渉があるからに違いない。ソ連もまた謀るところがあるから、松岡を何日も引き留めているのであって、最後には必ず何らかの手を打とう。ただ断言できることは、松岡はソ連にたっぷり弄ばれるということである。」（蒋介石、4 月 11 日の日記）

「松岡がソ連を出発するとき、スターリンはみずから駅まで見送りに行ったうえ、松岡を抱擁し接吻した。このようなことはソ連としてはかつてなかったことである。だが、これは日本に阿るような気持ちがソ連にあるのではなく、本当のソ連のねらいは独日関係の離間にある。日本は愚かにも、その詭計にはまったことに気づいていない。」(蒋介石、4月14日の日記)

独ソ戦についてのソ連軍将校の回想

「ソ連がヒットラーに攻められて、レニングラードはドイツ軍に包囲され、50万の餓死者を出し、スターリングラードも陥落の寸前にあった。やがてモスクーも危険にさらされていた時、なぜ日本はソ連を攻撃しなかったのか。虎林、虎頭でも、黒河でも、満洲里でも、どこでもよい。シベリア鉄道の一部が遮断されれば、アメリカからウラジオストックを経て遥々運ばれてくる兵器、弾薬、食糧の補給は忽ちにして阻まれ、ソ連は手を挙げるほかは無かったのだ。ドイツに反抗できたのは、主としてアメリカからシベリア経由物資の補給によるものだった。一体、日本は何をぼんやりしていたのだ。あのとき日本が一発やっていれば、君らとは所を替えていたであろう。」(平島敏夫『楽土から奈落へ』130頁)

表1 武器貸与法によるアメリカの国別支援額

(1945年9月までの合計。10万ドル以下は四捨五入)

イギリス	313億9200万ドル	ソ連	112億9800万ドル
フランス	32億3400万	中国	15億6500万
オランダ	2億4900万	ベルギー	1億5900万
ギリシャ	7600万	ノルウェー	5300万
ブラジル	3億3200万	チリ	2200万
メキシコ	3900万	ペルー	1900万

その他、ユーゴスラビア、トルコ、サウジアラビア、ポーランド、リベリア、エチオピア、イラン等合計38ヶ国へ支援がなされている。支援総額は507億ドルに達する。(Lend Lease, Eventful Years, 1937 through 1946)

表2 ソ連に出荷されたアメリカ軍需物資

航空機	1万4800	トラクター	8100
戦車	7100	鉄道貨車	1万1200
ジープ	5万1500	機関車	2000
トラック	37万5900	機関銃	13万1600
オートバイ	3万5200	食糧	447万8000トン

「ヤルタ密約」に際してスターリンが語った言葉

「現在我々は日本を攻めようとしているが、日本は我々を攻めていない、日本は目下のところ極めておとなしいうえに、ソ連に対して好意を示してさえいるのだ。もしわれわれが日本を攻めたならば、ソ連の人民は何と言うであろうか？ 『日本人はまだ汝を犯していないのに、汝は日本を攻めようというのか？』 私はどうしたら日本を攻めることの正当性を証明することができるであろうか？——『外ならぬ、ただ我々の国力を強化するためである』というしかない。」

ポツダム会議のさなかに原爆実験成功の報

アメリカ統合幕僚会議のメンバーの意見

▲アーノルド航空隊司令官 「通常の爆撃で対日戦を終わらせることができる」

▲マーシャル統合参謀本部長 「原爆使用前に日本に降伏のチャンスを与えるため、少なくとも事前警告すべきだ」

▲キング海軍作戦部長 「海上封鎖だけで日本は飢えて降参し、戦争にトドメをさせる」

▲アイゼンハワー連合軍欧州最高司令官 「原爆投下はまったく不必要だ。もはやアメリカ兵の生命を救う手段として必須ではなくなった。この恐怖の兵器を使えば、世界に反米世論を巻き起こすだけだ」

日本は連合国との和平をソ連に取り持ってもらおうと天皇の親書を送る

ポツダム会談の場でスターリンはその親書をトルーマンに見せる

スターリン 「此のコミュニケーション（天皇の親書）に回答する価値はありますか」

トルーマン 「わたしは日本を信用していませんからね」

スターリン 「子守唄で日本を寝かしつけておくほうがよいかもしれませんね。日本が派遣を申し込んで来た特使の性格がハッキリしないと指摘して、一般的にとりめもない返事を出しておきましょうか」

「ポツダム宣言」を発する前にアメリカの3長老がトルーマンに勧告

3長老（スティムソン陸軍長官、マーシャル統合参謀本部長、コーデル・ハル前国務長官）

宣言に3つの要素を入れれば、その1つでも日本の降伏を導くと示唆した

- ① 「スターリンの署名」（日本は不幸にもソ連が自分たちの味方であるといまだに信じているが、スターリンが署名すれば、日本も目が覚めるであろう）
- ② 「天皇保持の約束」（天皇制は、我々は壊すようなことはしない）
- ③ 「全面的破壊の裏付けとして原爆」（もし宣言を受諾しないならば、恐るべき破壊兵器「原爆」を投下することになる）